

～世田谷区川場村縁組協定40周年記念式典・シンポジウム～

【第2部】 シンポジウム（基調講演）

令和3年11月28日（日）13時50分～

東京農業大学 横井講堂

○司会 大変お待たせいたしました。ただいまから世田谷区・川場村縁組協定40周年記念シンポジウムを開始いたします。

それでは、本日、都市と農山村の交流をテーマに御講演いただくNPO法人共存の森ネットワーク理事長、澁澤寿一先生を御紹介させていただきます。皆様どうぞ、お手元の式次第を御覧ください。

澁澤先生は、東京農業大学大学院修了後、国際協力事業団専門家としてパラグアイに赴任されました。帰国後は、長崎オランダ村、ハウステンボスの企画、経営に携わりました。現在は、NPO法人共存の森ネットワーク理事長として、全国の高校生100人が森や海・川の名人を訪ねる聞き書き甲子園の事業やなりわい塾など、森林文化の教育、啓発を通して人材の育成や地域づくりを手がけていらっしゃいます。また、岡山県真庭市では木質バイオマスを利用した地域づくり、里山資本主義の推進にも取り組まれています。また、NHKの大河ドラマ「青天を衝け」の主人公となっている明治の実業家、澁澤栄一氏のひ孫ということでございます。

それでは、澁澤先生、よろしく願いいたします。（拍手）

○澁澤氏（NPO法人共存の森ネットワーク理事長） 澁澤でございます。こんな高い席からお話をさせていただきます。

まずはともあれ、川場村と世田谷区の40周年の縁組協定、皆さんおめでとうでございます。

私はもう10年になるんですが、世田谷区で教育委員を務めさせていただいております。もうその意味では、川場村には本当にお世話になっております。今の教育というのはどちらかというと、目と耳から入ってくる情報をどうやって頭の中で処理して、そして自分の行動につなげていくかというのがもう教育の主流になってしまっているんですが、まさにこの移動教室は、目と耳以外も全ての五感を使って子どもたちが自分のどうやって次の行動をしていくか、自分はどういうふうに考えたらいいのかということを本当に身をもって体験できて、世田谷区の子どもにとっては大変な財産になっております。その意味では、川場村の皆様本当に長い間、子どもたちを育てていただき、お礼を申し上げますとともに、これからもどうぞ本当によろしく願いしたいと思っております。

また、世田谷区にとりましても、川場村のお子さんとの交流をさせていただきながら、両方の地区の子どもたちが、やっぱり今、なかなか教育システムの中で持ち得ないような経験をぜひさせていきたいなと思っております。

長くなりましたが、私は、昭和55年に大学院を卒業しております。ですから、まだここが農大の図書館だった頃の卒業生なんです、今日こうやってお声をかけていただいたのは、多分今御紹介があったんですが、「青天を衝け」でちょうど澁澤栄一がやっているから、ちょうどいいから客寄せパンダじゃないけれども、出しとけやということでお声がかかったのかなと思っております。ただ、私、栄一は全然存じないんです。私は1952年の生まれで、栄一は昭和の戦前にもう亡くなっておりますので、多分皆さんが知っていらっしゃる栄一、もうテレビの中でいろんな形で持っておられる情報と私の情報は大きく違わない、ただ名前が一緒だというだけでここでこんなお話をさせていただいているということはお許してください。

栄一の話からなんですが、実は栄一が西郷さんと一番最後に会った、挨拶を交わして、彼が西南戦争に行くということで挨拶を交わしたときの愛宕山です。今、放送博物館があるところからなんです。向こうにずっと窓が見えますのが、長州藩の上屋敷です。確かに瓦屋根でなくなって、今もうビルになっておるんですが、今でもこの愛宕山の上に行くところこんな風景です。江戸というと物すごい昔の話のようなんですが、実はそんなに昔の話ではないということです。

実はその栄一というのが、いかにもスーパーマンのように思われていて、500以上の会社をつかって、600以上のいろんな福祉団体を始めた、教育機関を始めた、そんなことをつくったんだ、彼みたいな人が出てきて日本が変わったんだと皆さんは思われているかもしれないんですが、私は若干見方が違います。まさに栄一を生んだこの江戸という時代が、今の私たちにとってはとても参考になる時代だと私は思っております。

今SDGsと言われておりますが、江戸時代って基本的にはほとんどSDGs、ジェンダーの問題なんかは若干あるかもしれませんが、ほとんど解決をしているんです。多分江戸時代が今だったらSDGsなんていうことは世の中起きてきていない。なぜかというところ、鎖国をしていますから、外から物資が入ってこないわけです。ですから、エネルギーにしても、今のように石油ですとか、原子力も含めてですが、海外からの資源で私たちはエネルギーを得ていますが、その当時は自分のところの国のエネルギーだけです。なおかつ、それは地下資源ではないんです。全部植物が要するに固定した、皆さん御存じの光合成です。植物が太陽エネルギーを自分の体の中に固定します。太陽の光と水と二酸化炭素で自分の体を植物はつくっています。そこで固定したもの、あるいは植物性プランクトンがやはり光合成で固定したもの、それだけが1年間で使える全てのエネルギーです。まき

ですとか、炭ですとか、あるいは魚の油ですとか、菜種油ですとか、そのエネルギーで、多いときは3500万の人口と言われていました。今の3分の1ぐらいの人口ですか、全部回っていたわけです。なおかつ、食料に関しても、今のように外から入ってきません。外から入ってきませんから、3500万だから食えたんだろうと思われるかもしれないんですが、その当時の田んぼの、1反部当たり、10アール当たり、平均収量2.5俵、2.5俵というのは150キロぐらいです。2.5俵と言われておりますが、今は10俵取れます。4倍取れるようになっています。ですから、食料にしても、仮に今私たちが江戸時代の暮らしをもう1回取り戻したら、完全に、ある意味ではほぼ自給できるというエネルギー量を得ていたわけです。

なおかつ、それが何で可能だったのかというのは、まさに江戸が循環型の社会をつくっていたからです。家康がここに幕府を開く、その前の太田道灌の頃からなんですが、この周辺は関東ローム層という富士山の火山灰です。要するにススキだとか、ペンペン草しか生えないと言われた農耕に適さないといったところに、そこに大都市をつくった。その富士山の火山灰を豊かな農地に変えたのは、まさに江戸の住民の排せつ物、ある意味では汚い話ですが、うんち、おしっこを農地に戻すことによって、黒ぼくという非常に豊かな土壌をつくった。つまり周辺の生産力が江戸を支えていたわけです。江戸がその当時、世界最大の町と言われていました。100万から150万人の人が住んでいたと言われていたんですが、何で江戸が世界最大になったかというのは、江戸の周辺に100万から150万の人間の食料を支える生産能力があったということです。要するに、パリやロンドンよりも大きかったというのは、パリやロンドンよりも人を食わせるだけの生産能力を周辺に持っていたということが江戸の特徴であり、なおかつ、その生産力を支えたのは、人間の出したごみ、あるいは廃棄物によってその生産力をつくっていた。

そのためには、江戸の主な職業は、もうほとんど修理業だとか、古着屋だとか、古道具屋、つまりリサイクル業がほとんどです。江戸の末期に、江戸の中の市中のそば屋の数が大体3700件と言われております。そのそば屋よりさらに多い古着屋が3900軒ぐらいあります。古道具屋が3600軒ぐらいあります。だから、ほとんどのメイン産業、要するに基幹産業というのは、このリサイクル、あるいはリユースに関するものだったということです。そして、江戸はもう歯を食いしばって生きていたかという、そうではなくて、豊かな文化をつくっていたということです。

こんな風景です。これは江戸の幕末に来た外国人が撮った写真なんですが、実はこの風

景、私は鮮明に覚えているんです。それは渋谷の東急プラザという、今の東急プラザの先代の東京プラザです。あれが駅前に立ったときに、あの建物の売りは、最上階にレストラン街ができたことだったんです。それまでデパートって大食堂だったのが、有名店が、あの一番上の最上階にみんなのれんを出したんです。早速、ばあさんに連れられて、その最上階に行って、ロゴスティーというロシア料理屋さんだったと思うんですが、そこの窓辺に座って下を見たときに、まさにこれと全く同じ光景が、今の渋谷駅の南口のバスロータリーにこの光景がありました。つまり江戸ってそんな昔の話ではない。つまりこのシステムというのは、ついこの間まで日本が当たり前のように文化として持っていたシステムだということです。

なおかつ、これはイザベラ・バードというイギリスのお医者さんの奥さんなんですが、今でいう非常にとんがった人です。世界中を旅行しています。多くの紀行文を残しています。それが彼女が、会津から米沢に向かっている山中でこんなことを書いています。その旅程を終えて宿に着いたとき、馬の革帯が1つなくなっていた。もう暗くなっていたのに、その男はそれを探しに一里も引き返し、私が何銭か与えようとしたものを、目的地まで全てのものをきちんと届けるのが自分の責任だと言って拒んだ。これで彼女はとても驚いているんです。つまり、馬子です。馬子というのは、ある意味ではその当時の世間の階層の中では一番下の人です。一番下の人が、自分の責任だと言ってチップを受け取らなかったって言ってイザベラ・バードはもうびっくりしているわけです。その当時のイギリスでは、貴族階級、要するに上流階級の中には責任という言葉はありました。だけれども、労働者階級の中には、責任を果たすという概念はほとんどなかったです。その当時、まさに先ほどの江戸の循環型社会の中では、馬子に至るまで自分の責任だという社会があったということです。そこに栄一は資本主義というツールを持ち込んだにすぎないわけです。

栄一は、フランスに行ったときに、その経済というものの前では、それこそ国王から商人から農夫まで、要するにお金の前には全てがみんな平等だということにびっくりしたわけです。その当時の日本は士農工商です。まして、新しいこれから日本が国になるときに、その士農工商という身分制度を撤廃して、もう1回みんなが平等に国づくりをしたいと彼は思っていた。御承知のとおり彼は百姓の息子ですから、テレビの中にも出ていましたが、武家階級に要するに理不尽な要求をされたという経験をたくさん彼は持っていました。ですから、何とかこの経済を入れることで、平等な国をつくりたいというのが、栄一が資本主義に会ったときの要するに一番最初の印象です。そして、まさにその当時あった

高利貸し、お金というものに国が信用を与えることによって、要するに今までの資金の調達から信用の調達に変えて、そしてその資金を集めて、それを国のいい発展の方向に投資をして、運用して、そして責任を持って運用したその結果をもう1回市民に返す、それが彼が考えた理想の資本主義。

実は彼は資本主義という言葉は使っていません。合本主義です。要するにみんなの信用を集めて、それをみんなでいいと思う方向に運用して、そしてみんなの利益にする。ですから、三菱が自分のところだけで、要するに資本の論理で利益を出したいというシステムをつくらうとしたときに、最後まで彼は反対をしたわけです。

ただ、今資本主義の父と彼は言われています。私が小学校の頃はまだ敬三という、栄一の孫なんです、本家の孫です。彼が存命でした。実は栄一の長男というのは、これから出てくるかもしれませんが、芸者さんと駆け落ちして廃嫡をされます。栄一の子どもたちは、今も血筋かもしれないんですが、大体あまりしっかり仕事をしないで、そっちのほうは非常にたけておられたみたいです。そんな関係で、その長男は廃嫡される。やはり千代さんの最初の子どもですから、何とかやっぱり家督は千代さんの血筋に残したいと多分栄一は思ったんです。その孫の敬三に家督を譲った。彼はもともとは農村研究なんかをやりたいと思っていた人間なんです、結局、栄一の家督を継いだために、第一国立銀行の頭取にされ、そして日銀総裁にされ、そして戦後は、彼が大蔵大臣、今の財務大臣と言われているときに、財閥解体をやれと言って財閥解体をするというような、まさに資本主義のど真ん中を歩かせられた人です。その敬三が、私が子どもの頃にしょっちゅう言っていたのが、じいさんが資本主義というとんでもないものをこの国に持ち込んだという話をしていました。そのときは分かりませんでした。要するに今の国は資本主義で動いているんだから、これが何でとんでもないことだって、しかもその中心を歩んでいる敬三が言うんだということを私はそのときは理解できなかった。後でそれが分かるようになります。

お金というのは、大変公平なものです。世界中、私は特に農業技術屋でしたから、発展途上国ばかりです。発展途上国でも、その国の首都に行くことはほとんどなくて田舎ばかりです。そうすると、その国の公用語が通じない国ってたくさんあります。まして英語なんていうのは全然世界共通語じゃないんですよ。ビジネスの要するに上の人たちの世界共通語かもしれませんが、一般の庶民はその国の母国語すらしゃべれない、要するに民族の言葉しかしゃべれないというようなところがたくさんあるんです。ところが、お金だけは世界中どこに行っても通用するんです。つまり、マネーというのは世界共通語なんで

す。

そのマネー、とても便利な道具だったのが、まさにパソコンの普及、そのパソコンの中でいろいろな高速の計算ができるようになって、ウォール街の頭のいい人たちが、そのパソコンを使って、パソコンの中でお金がお金を生むというシステムをつくってしまいました。デリバティブ取引ですとか、サブプライムローンですとか、横文字を聞かれた方もいらっしゃるかと思います。もう1990年代の後半から、急激にその金融手法が増大を始めます。各国の政府は少しでも自国政府の為替を安くしておきたい。そのほうが輸出に便利だからということで貨幣をたくさんマーケットに注ぎ込みました。そしてそのマーケットは、ほとんど要するに金融資本に吸い取られていったということです。例えば今でも、もうコロナで本当に明日の自分のお店も分からないという飲食店の方々、あるいは旅行業界の方々、それからエッセンシャルワーカーという日々必死に働いているの方々、そこにはお金が行かないです。ところが、テレビのスイッチをつけると、株価が3万円だ、2万9000円だ、ニューヨークに至っては過去最高を更新した。要するに、いかに今このコロナの対策のお金も、大きく見ると、ほとんどこの金融資本に吸い取られているということが言えます。

今、実体経済の70倍から100倍の金融資本があると言われていています。経済学者とこの間お話ししたら、今回のコロナでこれが1000倍になったんじゃないかというお話もしています。つまりお金というのが、日々の生活に使う、みんなが平等であるためのとてもいい道具であったものが、お金が目的化して、そしてそのお金がどんどん増えたことによって、今私たちの経済は、ある意味ではこの金融経済の海の中に浮いているような状態、果たして本当にお金というものが信用を持ち得ているのか、あるいはお金を使う人たちが責任を持ち得ているのかということを今、疑問に思う人たちが多くなりました。その不公平感がまさにアメリカでトランプ大統領を生んで、イギリスがEUから離脱して、カタール・ニヤはまた独立しようという運動が起きたり、要するに何となく今の世界の風潮は、その不公平感に対する反発ということも言えます。ここにあるように、僅か1%の人が世界の50%以上の資産を持っているというのが現状です。僅か26人の人が、下位の38億人の資産よりも上回ったという報告が国連でおとしなされました。今はもっとそれがさらに進んでいるという状況です。

江戸から150年たちました。本当に科学と経済は発展しました。つまりあの栄一の時代に比べたら、今はとっても発展した社会だと皆さんは思われていると思います。だけれど

も、本当に発展したんでしょうかということをご検討いただきたいなと思うんです。人間や社会は本当に発展したのか、発展というのは基本的には幸せになるための、そのためにやるものです。何となく世田谷区の子どもたちを見ている、その科学の進歩と経済の要するに拡大に、何とか自分がついていかなきゃいけない、あるいはそこから振り落とされたら、自分は世の中で生きていけないと思って、不安に思って、そういう子どもたちがとても多いです。大人を見ている、ほとんどの大人の方々が、この社会の発展についていかなきゃいけないんだと思ってあくせく働いています。本当に私たちは幸せというものを日々考えているのか、持続可能な発展とSDGsでは言っています。持続可能な発展ということが本当に可能なのかということです。

私は最近こんなふうに思っています。経済とか科学というのは後戻りしないんですよ。どんどんどんどん先へ進んでいます。ですから、江戸時代より今の経済や科学のほうが確実に発展をしています。だけれども、それは、基本的には文明と言われているものなんです。世の中を便利にするためのものです。便利イコール幸せかということ、必ずしもそうではないかもしれません。これはある意味では本当に一方向に直進をしていく時間です。それと同時に、もう一つ文化というものがあります。要するに私たちが物を食べて、そして生きていく、そのベースの部分です。先ほどの川場村と世田谷区の協定の中にも文化という言葉が度々出てきました。この文化というのは、まさに循環する時間なんです。要するに、明けない夜はないんです。春、夏、秋、冬、ものが実って、そしてまた冬が来ても春が来る、その循環していく要するに日々の中に自分たちの幸せが持続性をつくってきた。それがある意味では江戸であり、そして今日農山村と言われている場所だと思っています。それがまさに持続可能な社会なんです。この文化と文明のバランスをどう取っていくかということをおぼろげに考えないで、この文明の発達だけを追っかけてきた、これが今日の私たちの社会かもしれません。

そんなことを思わせるのは、実は私、NPOの理事長として紹介されたんですが、そのNPOは何をやっているかということ、今日お越しになっていますが、林野庁さんと一緒に、今農水省の所管になっていますが、この聞き書き甲子園という事業を20年間やっています。全国100名の高校生たちを公募して、100人の日本の森や川や山、海、そういう自然の中で生きてきたお年寄りの聞き書き、人生を聞いて、そしてそれを文字に書いて残していくという作業です。20年続けてきましたから、今まで2000人の方の人生の記録が残りました。2000人の高校生がここから巣立っていきました。その2000人の残った記録の中のほ

とんど400人以上の方がもうお亡くなりになっています。80代、90代の方を中心に、そういう方々の人生を記録していきます。これは山形のシダさんというマタギの有名なおじいちゃんでした。去年お亡くなりになりました。そこに福島の高校生が聞き書きに行った風景です。マタギさん、狩りをする人です。ですから、狩りの話を聞くんだと思って高校生は行きます。ところが、おじいちゃんが狩りをするのは5月の連休明けの1週間から10日ぐらいのもの、その時期がちょうど熊が穴から出てくる時期です。雪が締まって、雪の上を狩人が歩けるような時期になります。その1週間か10日が狩りの時期なんです。というのは、何でそこで狩りをやめちゃうかという、その時期はもうすぐに山菜の時期になるからです。ゼンマイにしても、ワラビにしても大変貴重な食料であり、現金収入です。山菜というのは待ってくれません。その日に取らないと伸びてしまって、硬くなってしまいます。ですから、おじいちゃん、狩りどころじゃないです。地面にはいつくばるようにして山を歩いて、ゼンマイを取って回っています。ちょうどそのゼンマイの時期がちょっと過ぎたぐらいからもうすぐに田植えの準備です。そして田植えがあって、夏野菜の定植があって、それからは田んぼと畑、雑草との戦いです。そして稲刈りが終わって、カヤを刈って、ソバを刈って、もうまきの準備をしたらすぐ冬です。冬の間は雪がありますから外へなんて行けません。もう炭を焼いて、そして道具をつくってという暮らし、翌年の春を待つわけです。つまり、おじいちゃんがやっているのが、マタギという職業ではなくて、マタギという生き方をやっているんです。

つまり、自然を利用しながら、自分の手によって自然の中でいろいろな技術や知恵を使いながら生きていくということをやっている。おじいちゃんは小学校しか出ていません。小学校しか出ていないですけども、自分の人生に誇りを持っています。もう1回生まれでもマタギになりたいと言います。そしておじいちゃんは何の不安もないと言います。北朝鮮からミサイルが来ようが、株価が大暴落しようが、全く関係ない。俺は山さえあれば生きていける。おじいちゃんが病気になったら山へ行きます。山に行ってこの木の皮を剥いで、その内側をこうやって飲むと胃に効くんだとか、あるいはこの実を焼酎に漬けて飲むと熱が下がるんだとか、あるいはこの葉っぱを貼っておくと腫れが引くんだとか、おじいちゃんにとっての薬局はまさにその山そのものなわけです。つまり自然の中で生きていくということを延々とやってきた。

ところが、高校生はびっくりするんです。先生たちに一生懸命勉強しろと言われてます。勉強しないといい会社へ入れない、いい会社へ入れないと安定した人生が送れないから勉

強しろ、とつても戸惑います。これは今まで参加した2000人の高校生が、ほぼ2000人全員同じ戸惑い、カルチャーショックに当たります。そうして見てみると、この国が明らかに全く違う国になったと思われるぐらい変わった時期があるということが分かります。

1960年から65年、ちょうどこの前の東京オリンピック前後の5年間ぐらいで日本は大きく変わりました。それまでは生きるということと働くということが同じ意味でした。働かって別にお金を稼ぐために働くんじゃないくて、自分が食べ物を得るため、あるいは自分が寒い思いをしたくなかったら自分で火を起さないと、自分は生きていくことができなかつたし、そして服をつくるためには自分で機を織らなきゃいけないという時代、それは何もおじいちゃんの時代だけじゃなくて、延々と続いてきた。この日本に日本人が住み始めてから延々とやってきたことです。

ところが、私たちはこの60年ぐらい、全く違う暮らしをするようになりました。ちょうどこの真ん中の時期に三種の神器という、年配の方は御記憶があるかもしれませんが、テレビ、冷蔵庫、洗濯機が私たちの暮らしに入ってきました。自家用車という乗り物が町の中を走るようになりました。それまで車なんていうものは工場とか役場が持っているものですが、一般の家庭が、1家に1台車が来るなんて考えもしませんでした。そんな時代です。新幹線が通ったのもちょうどこの時代、東名と名神の高速道路が開通したのもこの時代です。それから今の私たちの暮らし、これを見ていただくと分かるんですが、ほとんど全部がお金で買うものです。なおかつ、そのベースにあるのは化石エネルギー、あるいは化石資源と言われているもの、それを利用して、今の私たちのこの豊かな暮らしができています。今日、このホールの空調も、今使っている電気も、全てある意味では化石エネルギーから得たエネルギーによって、今の私たちが成り立っているということです。高校生たちは思うわけです。本当にこのピンクの世界がこれからも続いていくんだろうかということなんです。

この時期を都市と農山村という視点で見るとこんなになります。ちょうどまさに1965年前後、60年前後に人口が逆転をします。それまでは農山村がベースです。なぜかという、自分たちの食料を得るのも、エネルギーを得るのも、全て得るのは、要するに自然の中から得てきたからです。ところが、海外から物資を得るようになり、食料もエネルギーも全て得るようになり、より効率的に、より経済的に、より早くということ考えたときに、全ての人々が都市に集まってきました。まさにそこはお金で成り立っている社会です。

そして、今の日本の食料自給率です。これはカロリーベースですから一概に全ての食料とは言えませんが、少なくとも東京は食料自給率が1%です。大阪も1%、神奈川2%、川場のある群馬県でも33%、3分の1だということです。日本はこの60年間にこういう国になりました。60年前の日本の食料自給率は80%を超えています。自分たちの食べ物は自分たちで得てきたその国が、食料も資源もエネルギーも全て海外に依存して、より効率的に、よりお金のもうかるものをつくろうとして、私たちは国づくりをしてきました。誰の責任でもありません。みんなでやってきました。今、御飯一膳の値段とイチゴ1個の値段が一緒です。約30円です。イチゴを高いという高校生は誰もいません。御飯はTPPでもっと安くなるんでしょとみんな言います。100円バーガーの3分の1が御飯一膳の値段です。その価値をつくってきたのは、農水省でも、役人でも、政治家でもないんです。それはマーケットです。私たちです。江戸時代の人が見たら多分とつてもびっくりする社会、それを今私たちは、便利ですけれども、暮らしています。

そして、地球環境はどんどん変わってきました。60年前、1960年、これはエコロジカル・フットプリントという1年間の自然の成長量を人間という生き物がどのぐらい使っているかを表しています。60年前、人間が半分を使っていました。あとの半分以上を動物だとか、あるいは昆虫、バクテリアが使っていた。それで地球は持続的に維持されてきたわけです。ところが、この60年間、人間の社会はどんどん発達をしました。化石燃料も湯水のように使いました。皆さん、石油が値上がりした、大変だ、大変だとおっしゃるかもしれないけれども、ガソリンが1リッター160円です。1億数千年前の時間に数千万年という長い時間をかけてつくられた、地球の中につくられた石油というもの、それが僅か1リッター170円、160円です。生ジュースが1リッター幾らか、牛乳が1リッター幾らかということ考えたときに、その1億数千万年という時間を私たちは価値として今の経済では把握をしていません。そのために私たちは便利な社会をつくってきました。

今、1.8ぐらいがエコロジカル・フットプリントです。もっと悲しいことに、世界中の人が私たち日本人の普通の暮らし、何も贅沢でない普通の暮らしをすると地球がちょうど3個必要です。地球3個分の自然の成長量を使うぐらいの私たちはレベルで今生活をしているということです。本当に私たちは先進国なんですか。科学と経済の先進国かもしれません。だけれども、地球上の全ての人たちが私たちのまねしたら、地球は持たなくなるということです。本当に先進国なんですかということです。そして、私たちはSDGsという世界です。

皆さんが御存じのSDGsってこの上の17の目標がほとんどだと思うんですが、この17の目標は、SDGsのアジェンダの一番最後に出てくる部分です。一番最初に書かれているのはここにある経済、社会、環境の調和により、我々の世界を変革すると言っているんです。変革って相当強い言葉を書かれています。それをやらないと、我々は貧困と不平等を終わらせる最初の世代になり得る、同様に地球を救う機会を持つ最後の世代にもなり得るということです。2030年に地球が滅びると言っているのではないんです。ところが、2030年まで今のままのような発展を人類が続けていると、もうどんなに科学技術が発展しても、どんなにそこから経済ルールをつくっても、もう地球が大きい生態系は元に戻りませんよということを言っています。切羽詰まっています。あともう僅か9年ないです。8年数か月かもしれません。そのぐらい今の地球はやばくなっているということです。この60年です。この60年、私たちが使ってきた、私たちが行ってきた発展の形です。

そんな中で、私たちの知る唯一の持続可能な社会は、先祖から続く皆さんだということです。皆さんが今日ここに生きていらっしゃるということは、皆さんの御両親がいたということで、その御両親もまたその上に両親がいた、その皆さんの御先祖のうち1人だけでも、自分だけよければいいや、今だけよけりゃいいや、お金がもうかったらいいやと思っていたら、まさに皆さんは絶対いらっしゃらないということなんです。みんな命のリングを次の世代、次の世代につないできた。そのつないできたその結果が今の私たちです。一体私たちはどんなリングを次の世代につなぐのかということです。

持続可能ということで、もう大分前です。まだ私が30代の後半ぐらいのときです。今からもう三十数年前です。一番最初に会ったのはこの村でした。というのは、その当時私は、長崎のハウステンボスの建設の仕事をしていました。もうオープンが間近に迫っているときに、秋田県の役人の方が1人来られました。そして、ちょうどその当時、ハウステンボスは持続可能都市というのを売り物にしていたものですから、環境技術を売り物にしていたんです。その役員の方が、秋田の村で江戸時代から残っている過去帳を全部調べてみたんだけど、幾つかの村で一人の餓死者も出ていない村があるんだということを知りました。これは持続可能って言うていいんですかというふうにわざわざ聞きに来られたんです、長崎にまで。もうすぐに私はそこに連れて行っていただきました。私は、学生時代、秋田の農村でバイトをしていたことがあって、秋田の米づくりがいかに大変だったかということはもう身をもって知っています。何回も飢饉があります。菅江真澄さんという江戸時代の紀行文を読むと、もう毎年どこかで飢饉があって、死体が要するに道の両側に

並んでいて気持ちが悪いということが度々出てきます。そのぐらい農業が大変だったときに一人の餓死者も出ていない村がある。天保や天明の大飢饉を乗り越えた村があるというのは私には信用できなかった。

連れていかれたのはこんな山の奥の村です。村の上から見たらこんな風景です。70戸でも250人、もうその当時既にもう過疎が始まっていたというような集落でした。確かに田んぼは広いです。田んぼは広いんですけども、山奥です。この上にはもう集落はありません。ですから、水が冷たいです。夏はやませが吹きます。田んぼから一粒もお米ができないということは容易に想像ができます。こんな不便なところ、こんな山奥で一体何で生きてきたのかと思いました。丸で囲っているところがあります。木が全部切ってあります。私はまだその当時、農業のほうは、少しは知っていましたが、林業のほうは全然知りませんでしたから、あんなふうに木を切ると、大雨が降ってがけ崩れが起きるんじゃないですかと言って、村の人たちにばかにされます。

皆さんに見ていただいて、この左手の黒っぽい緑、これは杉です。常緑の針葉樹という人工林、人間が植えた木です。こういう木は上を切ると根っこも枯れます。ですから、あいう切り方をすると、5年ぐらいすると、土砂崩れが起きるようになってきます。ところが、皆さんの右下の要するに明るい緑の木、あるいは落葉の広葉樹と言われている例えばナラですとか、あるいはクヌギですとか、あるいは栗ですとか、そんな木です。そういう木は上を切っても根っこは枯れません。実はあの丸で囲った部分、これは村の共有財産です。共有林です。この村はこの広さの森を33か所、村から歩いて1時間以内のところに持っています。年間に1つずつ切っていきます。1つずつ切ると、翌年は横からわき芽が出てきます。そして33回切って、34年目、元のところに戻ったら、元の太さの森に戻っています。つまり日本人はこうやって自然の成長量の中で持続的にエネルギーを得てきた。

何もこの村だけじゃありません。ここの周辺、川場の周辺もそうですが、関東平野だってみんなそんなふうにしてエネルギーを得てきたわけです。そして山の近くに行くと、一面の緑です。この緑は全部ワラビです。ワラビはとても貴重な食料源です。上のワラビという山菜のワラビだけじゃなくて、この左下にある根っこ、デンプンの塊です。皆さんがわらび餅とって食べられているのは、この根っこのデンプンからつくったもの、それが本来のわらび餅です。ですから、飢饉のときはこんなものも食料にできます。そうやって聞いてくと、もうありとあらゆるものを山から得ていました。水も肥料も、それから燃料も、それから食料も、それから自分たちの家を建てる材、屋根を拭くためのもの、それか

ら繊維です。繊維はとても重要です。食料はなくても3日ぐらい生きていけますが、着る物がなかったら冬の寒い空では人間は一晩として生きていくことができません。ですから、どうやって繊維を得るかということは物すごく重要でした。道具も、それから現金も、それから動物性たんぱくも、多分生活に必要な塩以外は全部山から得てきたというのがこの暮らしだということが分かります。どのぐらい得てきたか。

これはお隣の山形県の小国で調査したときのものなのですが、東北に行くと栗1町、家1軒、栗が1ヘクタール、100メートル・100メートルの栗林があると家が1軒生きていける。あの集落もちょうど70町歩の栗林を持っていました。栗の収量、栗は2年に1度の隔年ですから、2で割って365日、10人家族で割って、栗の単位カロリーを掛けると2140キロカロリーです。つまり、今栗というのは、私たちが副食品というか、果物屋さんで売っているようなものですよ。だけれども、お米が一粒もできなくても栗で、多分ダイエットをやられた方は、この1500キロカロリーってよくお分かりだと思います。日本人が餓死しない、要するに内臓を維持するために最低限のエネルギーが1日当たり1500キロカロリーです。ところが、栗だけで2000キロカロリーを取っていた。つまり山のなりもので、米が一粒もできなくても食っていくことができた。だから、秋田平野は、飢饉のとき、お米が取れないと多くの餓死者が出たのに、山の中はお米が取れなくても餓死者が出てこなかった。こうやって持続的に生きてきたということが分かってきます。

これは250年の森です。奈良県の川上村という吉野林業のど真ん中です。そこにさっきの聞き書きの学生たちが、ちょうど大学を卒業するときにOB会をやろうというので集まっていったときの風景です。最初は森の大きさ、荘厳さにびっくりするんですが、すぐ頭を抱え出す子がいます。口があんぐり開きます。それは彼らが何に気づいたかということ、250年前、つまり江戸時代の人たちは、この森をつくることができたけれども、今の自分たちにはこの森をつくれないうことに気づくわけです。250年前に比べたら、もうありとあらゆるものが進歩しました。先ほどの科学は物すごく進歩しました。それから、何よりも林業機械が物すごく進歩しました。それから薬も、それから肥料も、そして遺伝の育種の苗も物すごく進歩した。だけれども、250年前の人はつくれたのに彼らはできない。それはなぜかということ、250年かかるということ。その当時は30年一世代、今でも20代から60代まで働いて40年一世代として、6世代の人がこの森に関わってもこの森はできないということです。7世代必要だということです。彼らは学校で、自分らしく生きなさいということはずっと教わってきます。だけれども、自分らしくをやっていたら、こ

の森はできないんです。自分がこの森を大切だと思うその思いを次の世代にどうやって伝えてくかということが、江戸時代では最も重要なことだったということです。

この中で何人かは林野庁の職員になりました。だけれども、彼らがどんなに林野庁の職員になっても、それから、彼らがどんなにチェーンソーの名人になっても、一代ではこの森はできない。つまり私たちの寿命と違う寿命のものを私たちは使う、自然は私たちの寿命とは違う寿命だということです。人間側が自然を使っていくならば、人間側が思いや知恵や、それから自分たちの生き方をつないでいく、その努力を人間がしないと、自然は永久に利用はさせてもらえないということです。本当に豊かになった日本は幸せになったのかということをいつも考えさせられます。

今、私は、主に仕事としては、地域づくりのお手伝いの仕事がとても多いです。昨日も岡山県の真庭というところから帰ってきました。里山資本主義と言われているところですが、もう22年間真庭に通っています。地域エネルギーで自分たちのエネルギーを賄おうというような試みです。地方に行っているとよく分かるんですが、過疎化、高齢化、少子化、都市との所得格差ですとか、教育環境、医療、働く場、それはもう全国日本中回っていて、耳たこです。金太郎あめのように日本中全部そうです。だけれども、水と食料は自給しようと思えば自給できます。川場村は、川場村の村民だけが食べていくならば、自給しようと思えば十分自給できます。エネルギーも、バイオマスや水力や風力、太陽光と言われている自然再生エネルギーを使いながら、100%と言わないけれども、少なくとも生活の最低限のエネルギーは確実に得ることができます。

実は今問題なのは、過疎化している農山村ではなくて、私たち都市だということです。世田谷だということです。空洞化、これは世田谷ではありませんが、例えば高島平や、あるいは多摩ニュータウンと言われている、今からあの高度経済成長のときにつくられた60年前のニュータウン、今はもう買物難民のお年寄りたちがたくさんいます。もうあの当時の公団住宅は5階までエレベーターがありませんから、もう自分たちで上り下りできません。ボランティアが買物を届けています。名古屋に行ったら高蔵寺ニュータウン、大阪に行ったら千里ニュータウンと言われている、ニュータウンと言われている場所です。もうニュータウンではなくなりました。もう大都市の中に過疎集落があるということです。

退職高齢者というのは団塊の世代の方々です。一番まだ元気で、まだお金もあって、知恵がある、その人たちが、会社の名刺を持たなくなった瞬間、社会との接点がなくなります。そして、その人たちは、行く場所は、デパートの地下かヨドバシカメラということに

なってしまうわけです。本当にそれでいいのか。そして都市に行くストレス、不安、そして今回のコロナの問題も、基本的にはコロナの問題は都市の問題です。都市の過密の中の生活、それが感染症を招いて、仮にコロナが終わっても、また次の何らかの感染症は多分出てくるんだと思います。

そして、若者の自殺の問題、雇用の場の問題、そして先ほどから見ていただいたとおり、都市は生存基盤を持っていません。かつての江戸と今の東京の全くの違いは、かつての江戸は、生産と消費ワンセットで江戸だったということです。今の東京は消費だけの町です。消費をするだけなら楽しいです。お金があったら楽しい町です。だけれども、それで本当に持続可能な社会をつくれるのか。エネルギーも、食料も、資源も全て海外に依存しています。そして、日本全国が、もうこれは山村も都市も関係なく人口減社会に向かい、IoTが入ってきて、まさに新しい働き方を見つけていく。つまり昨日までの延長に多分明日の未来はないということを私たちはそろそろ覚悟をするべきだと思っています。

私たちと同じ暮らしをしたら地球が3個必要だ、異常です。そして、みんなが一生懸命働いているんだけど、絶えず追っかけられて、絶えず不安で、何となく昭和はよかったと言っている。それはやはり異常だと思うということです。それならば、これからの未来、子どもたちの未来のためにどんな社会をつくるかを考えなきゃいけない。そんなときに来ています。

こんな論文が発表されました。子どもたちというのは今の小学校5、6年生です。その半分以上の子、65%の子は、今は存在しない職業に就くということです。今から10年前、ユーチューバーなんて職業はどこにもありませんでした。eスポーツなんていう職業もどこにもありませんでした。つまり、これからどんどんどんどん今仕事と言われているものが仕事でなくなり、そして新しい仕事が出てくるということです。今のままの仕事だと、47%、今の約半分の仕事は、要するにコンピューターに置き換わっていく。そんな未来が、僅か10年か20年の未来、多分ここにいらっしゃる方ほとんどがまだ生きていらっしゃる、そんな未来に起きるということです。働くということは、生きるということは何なのかということを今もう1回変えていかないと、私たちはこれから多分生きていけないだと思っています。

私の世代、今日いらっしゃる多くの方の世代かもしれませんが、まさに働くということはGDPを向上させるということでした。要するに生産性を上げるため、もう日本が焼け野原になって、そして復興して、そして世界の中で一等国と言われるようになるために必

死に働いてきました。それはまさに今、日本の政治が、あるいは日本の経済の人たちが思っている価値観です。専業主婦はそこでは労働とは見なされませんでした。育児も介護も重要な労働とは言われませんでした。年収は高いほうが幸せで、どの会社に勤めているかということが社会的ステータスでしたし、大企業のほうが何となく中小企業より価値があるものだと何となく社会で思ってきました。全てのことを費用対効果で表してきました。費用対効果、コスパです。いい言葉ですけども、お金ではかれないものは価値がないという考えです。全てをお金で換算しています。テレビの番組を見ても、これ幾らですか、そこで初めて驚きます。そのものを見て、それに価値を生み出すということ、それを私たちは今しなくなりました。本当にお金が信用できるのかということです。

私、今地域づくりをやっていると、多くの若者たちが今地域に入ってくるようになりました。総務省の白書の中でも、田園回帰という言葉が使われています。その多くの若者たちが持っている価値はこんな価値観です。地に足がついて、コミュニティーの中で必要とされ、自分が必要とされるということはとっても重要なことです。自然の中でその恵みを得ながら、必要最小限度のものを持ちたい。そして、そこでは多くの人と世代がつながっていて、そしてお金より共感や共同、金に共感できなくても、共生、それが価値だ。共感が価値だと思うという若い人たちが今とても多く地方に入ってくるようになりました。ここではD oよりB eです。今までは、お金持ちになりたい、あるいはこういう職業に就きたい、プロ野球選手になりたい、看護師さんになりたい、みんな子どもたちの夢はD oでした。そして、何となく私たちも、要するに職業というものがその人の判断の基準でした。だけれども、マタギのおじいちゃんはマタギという職業をやっていたわけじゃないんですよ。マタギという生き方、まさにB eをやっていたということです。

一体どんな生き方をしたいのか、子どもたちが優しい人になりたいとか、それからいつも一生懸命生きたいとか、それから社会の中で役に立ちたいとかというふうに思ってくれる、そんな社会にしたいなと思います。現に今の大学生も、今地方に入ってくる人たちも、とてもそのことを大切にします。自分がやはり社会の役に立ちたいということがとても大きなモチベーションになっています。そして、そんな社会では、働くことと生きることはまた同じ意味、今からかつての60年前以前の日本人の価値観にとっても近いんです。お互いが持つ弱みを共有して、そこから社会づくりを考える。SDG sでは誰も置き去りにしないと言っています。誰も置き去りにしないという社会、それは今の競争社会で可能なんでしょうか、グローバル経済の中でそんなことが可能なんでしょうか。ただ、要するに

Beをみんなが重きを置くようになれば、それは可能だと思います。お互いの持つ弱みを共用しながら、そしてもう1回社会づくりを考えていく。まさに人生選択は職業選択でなくて、生き方づくりだと私は思います。

まさに今日のお話、川場の話も世田谷の話も、決して都市と農山村は対極ではない。江戸がいい例です。対極にしたら持続可能ではなくなります。基本的には、要するにセットで、私たちは生産と消費、1つの中で新しいモデルをつくっていかなくちゃいけないというふうに思っています。まさに川場と要するに世田谷は運命共同体と思えるか、要するに生産をする場、あるいは消費をする場、それが運命共同体となって、なおかつそれだけでは持続可能社会はできません。そこにどんな価値観を持って、何を大切として、どういうBeをする、どういうBeを求めているかという人たち、その人間をどうやってつくっていくか、その人づくり、価値観づくりをしていかないと、持続可能な社会は私はできないと思っています。

都市と農山村というのは、両方セットで初めて持続可能な系を持つことができます。文明と文化がワンセットで初めて持続可能なものになり得るといふことと全く同じだと思っています。地方創生を何となく経済創生だと思っている日本の風潮は明らかにおかしいと思います。地方創生というのは社会創生です。どんな社会をつくっていくのか、それは都市だけではできないし、地方だけではできない、その一緒に考えていく社会をこれから実践していく、それが川場であり、世田谷でありたいなと思っています。

最後の写真です。日本が変わり始めた昭和35年、これは長野県の一集落の風景です。親たちはみんな共同で田植えをしています。「結」といいます。彼らは仲がよかったからみんな田植えをしているわけじゃありません。この日のうちに田んぼ、全部田植えを終わらせなくちゃいけないからなんです。その当時は化学肥料も農薬もありません。ですから、お百姓さんが稲づくりでできることは、水を上げたり下げたり、要するに水加減で、その当時はお米のできを判断していました。肥料の効きが悪いと思ったら水を下げてやります。そうすると、土の中に酸素がたくさん行きますので、肥料が効きます。今日は寒くなりそうだなと思ったら水を上げてやる、それが農作業でした。稲作でした。ですから、全部その一面の田んぼが、要するに成長がそろっていないと、その調整をすることができなかった。一人で何日もかかってにっちらさっちら植えていたら、田んぼの向こう側とこっち側で成長が違っちゃうわけです。ですから、みんな力を合わせて一生懸命生きてきた。子どもたちはそれを見ていました。そしていつかあの輪の中に入るんだと自分たちで思っ

てきたし、最初苗を投げるところから始めさせられます。そして、下手に投げて、水しぶきや泥しぶきがかかると、大人たちに怒鳴られる。だけれども、それも1つの楽しい思い出でした。そして子どもたちは、子守りという重要な仕事を持っていました。

こうやって私たちは世代と世代をつなげてきました。人と自然がつながってきました。そして人と人をつなげてきました。ここに戻ると言うわけではありません。だけれども、つなぐということ、この間をもう1回つないでいくということが今の社会、これからの持続可能な子どもたちの未来を考えたときに、一番重要なことだと私は思っています。どうして、川場のこと、それから世田谷の子に、要するに私たちが誇りを持った社会をつくれるのか。環境問題というのはテクニカルな問題でもないし、政治の問題でもありません。私たちの心の問題です。私たちがどんな社会がいい社会だ、どんな社会を子どもたちに残したいか、それを考えるのが環境問題だと私は思っています。

いつかまたこんな人と人がつながった風景を実現できるように、これからまた川場と世田谷で協働しながら、その新たな社会づくりをしていきたいなと思っています。

長くなりました。私からの最初のお話は以上とさせていただきます。今日はどうもありがとうございました。おめでとうございます。（拍手）

○司会 澁澤先生、ありがとうございました。澁澤先生にも次のパネルディスカッションのパネリストとしても引き続き御登壇いただきます。

それでは、ここから休憩となります。53分に再開となりますので、皆様、再開までには御着席をいただきますようどうぞよろしく願いいたします。（拍手）